
令和7年度香川県学習状況調査報告書について

令和7年度香川県学習状況調査を令和7年10月、11月に実施しました。香川県教育センターでは、調査結果について成果や課題が明らかになるよう、児童生徒の学習や生活の諸側面等に関する状況を分析し、本報告書にまとめました。それぞれの市町や学校の実情に照らし合わせて、本報告書を適切に活用した教育実践がなされるよう、活用支援を行います。

1 調査の結果から見られる特徴

(1) 教科に関する調査結果の課題 (P2)

○ 知識・技能の活用・表現

【小学校社会】地図からの情報読み取り (正答率 48.2%)

【中学校英語】対話の流れに沿った英文作成 (正答率 27.1%)

○ 情報の整理・統合と論理的考察

【小学校算数】直方体の構成要素を用いた計算 (正答率 17.4%)

【中学校国語】文章理解に基づく自己の考えの形成 (正答率 38.3%)

(2) 質問調査の結果から (P3)

○ 「個別最適な学び」における認識の差

・解決方法などを自分で決めていると回答した児童生徒：小 63.4% 中 52.9%

・自己選択・自己決定の場を設けていると回答した学校：小 96.3% 中 91.6%

⇒ 児童生徒と教員との間で意識に差

○ 肯定的な動向

・自己有用感等（「自分にはよいところがある」）は令和4年以降増加傾向
(小 72.2% 中 73.9%)

・ICT機器の使用頻度は年々増加 主体的な活用の価値付けが今後の鍵

2 特集 子どもが実感する「個別最適な学び」へ

観点	現状・課題	改善に向けた方向性
学びがいのある 課題設定 (P7)	見通しをもてる児童生徒ほど主体的に取り組む傾向	既習事項と関連や解決の見通しを共有、課題との出合わせ方の工夫
自己選択・自己決定 (P8)	教師が用意する「選択肢」に留まっている	対話を通じて「一緒に決める」プロセスの重視

3 報告書の構成

(1) 全体結果 (P15~18) 結果の特徴及びクロス集計結果 (P19~23)

(2) 6つのカテゴリー分析 (P24~29)

学習意欲 言語活動 学習習慣 自己有用感等 学校生活 メディア利用

(3) 校種・教科ごとの改善提案 (P31~50)

(4) 調査の振り返り (P30, 51, 88)

言語活動 社会科 質問紙の経年変化

(5) あのときの5年生は今? (P52)